

シラヤシネドドラが優占し、夏季には前種が減少してラン藻のミクロステイスヤアナベナが多くなる。冬季には全体に量、種とも少なくなるがシネドドラはよく優占種となる。動物性では、オナガミジンコ、ゾウミジンコ及びケンミジンコが主で、ケンミジンコは冬季にも比較的多い。普通は、一地点で一五〇種類が検出される。そして、このようなパターンが毎年規則的に繰り返されてきた。ところが数年前からその均衡がくずれて、ある年には、日本では茨城県の神ノ池以外からは記録されていなかったラン藻のアナベノブシスが、他の種類を圧して大量発生したり、今までは、地点によつては、わずかに混在する程度であつたラン藻のオシラトリアが、また記録のなかつたびわ湖産の緑藻クロステリウムの一種が大量発生するという異常な現象が起こり、次いで昨年夏のようなアオコ(ミクロステイス)の爆発的発生を見ると、単一の種類だけの増殖が進み、種の組成もきわめて貧弱なものとなつてゐる。また、最近の特徴の一つは、汚染水域にしばしば発生するカワシオクサが、夏季に沿岸部で大量発生していることがある。

2 ベントス(底棲生物)

霞ヶ浦では、砂地にはトビムシ、泥池にはユスリカ幼

虫及びイトミミズの類が棲息し、現在一五種程度が記録されている。富栄養化が進むと、底泥の有機物量がふえて餌料が増加し、体液にヘモグロビンをもち酸素不足の環境にもよく適応できるユスリカ幼虫やイトミミズの繁殖に好適となる。実際、最近ユスリカ幼虫の量が急になつており、初夏の候など羽化した成虫の大群が湖岸の集落をおそひ、その対策に悩まされることが多い。土浦地方などでは、ワカサギ虫などといわれ苦情が出ている。ワカサギ虫の由来は、この虫が羽化するときに、ワカサギに食べられ、ワカサギの腹の中が真黒になつてゐることがあるからである。イトミミズも、従来は、湾奥部などの分布が主であつたのが、最近湖心部辺まで広がつてきている。

3 貝類

霞ヶ浦の貝類は、約二〇種数えられるが、主なものはカラスガイ、イケチヨウガイ、シジミ、タニシ、カワニナなどである。そのうち最近減少の甚だしいのはイケチヨウガイとカワニナである。前者は淡水真珠母貝としての需要増による乱獲が明らかな原因であるが、沿岸砂質地のいたるところに産したカワニナは、水質汚染に非常に弱い貝であるといわれるので、富栄養化の進行が無縁ではないと思われる。また、最近湖の沖合で、底びき